

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年5月11日現在

機関番号：14302

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009～2011

課題番号：21730703

研究課題名（和文）

読むことの学習において類似性に基づいた推論を促す手だてについての研究

研究課題名（英文） Research on the Approach of Forwarding the Reasoning Based on Similarity in Learning to Read

研究代表者

寺田 守（TERADA MAMORU）

京都教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：00381020

研究成果の概要（和文）：

本研究は、読むことの学習において、類似性に基づいた推論を促す手立てを開発することを目的とした。類推が教室の中で用いられる場合に、成功した類推は学習者が持ち込む概念のカテゴリーを強調することになるという知見が得られた。その上で、類推を促す学習活動の開発・検証を行ったところ、対話によって言葉の意味を吟味する中で、異議申し立てが起こることで類推が促されることが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：

In this research, I aimed at developing the approach of forwarding the reasoning based on similarity in study of Japanese reading. When students use an analogy in a classroom, the successful analogy will emphasize the category of the concept which students carry in. As a result of considering the study activities which forward an analogy, it became clear to forward an analogy by an objection being submitted while examining the meaning of words in the dialog.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
2011年度	400,000	120,000	520,000
年度			
年度			
総計	2,100,000	630,000	2,730,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：各教科の教育（国語）

## 1. 研究開始当初の背景

私は読むという行為を推進する力を明らかにするために中学校1年生41名に調査を行った。読むという行為を支える複数の力がどのように関わっているのかを調べた。

ここから「きつねの窓」とそこから連想するテキストとを＜関連づける力＞の特徴が明らかになった。＜関連づける力＞は＜反応

を表現する力＞や＜読書量＞と相関を示すが＜読解力＞とは相関関係にない。限られた範囲の調査だが＜関連づける力＞は＜読解力＞に置き換えられないことがわかった。＜関連づける力＞は類推を支える力である。読むことの学習で用いられる類推の内実を解明し、その果たす役割を明らかにすることが、重要かつ喫緊の課題だと考えるに至った。

	反応表現 (きつねの窓)	反応表現 (連想したテキスト)	関連づけ	読解力	ひと月の読書量
反応表現 (きつねの窓)		0.5913★	0.5712★	0.1872	0.3444★
反応表現 (連想したテキスト)	0.5913★		0.5334★	0.4566★	0.2499
関連づけ	0.5712★	0.5334★		-0.0055	0.6597★
読解力	0.1872	0.4566★	-0.0055		-0.0324
ひと月の読書量	0.3444★	0.2499	0.6597★	-0.0324	

反応表現 (きつねの窓) …焦点化、抽象化、詳述の程度、主題推論の水準を2名で得点化(一致率82.3%)

関連づけ …関連づけの観点の種類(役割、性質、行動、信念、結果、筋、主題)×項目数

反応表現 (連想したテキスト) …焦点化、抽象化、詳述の程度を2名で得点化(一致率82.1%)

読解力 …主人公の気持ちの変化を捉える設問  
ひと月の読書量 …ひと月に読んだ本の冊数

有意な相関係数に★を付した(n = 41, p < 0.05)。

類推の内実は比喻研究の進展によって明らかになってきている。言語学の分野においてG・レイコフは、比喻が単なる言語の問題でなく、例えば「議論は戦争である」といった考えを反映した思考の問題であることを明らかにした。認知心理学の分野において楠見孝は、二つの言葉のカテゴリーの意味が離れているほど面白く、かつ情緒的意味が近いほど面白いという比喻の処理過程を明らかにした。本研究では、関連領域の成果を応用しつつ、教室の授業場面で立ち現れる類推に注目する。本研究は国語科授業改善の基礎的研究として位置づけられる。

## 2. 研究の目的

本研究は、国語科読むことの学習において、類似性に基づいた推論を促す手立てを開発することを目的とする。

既得の体験的知見を基礎にして、未知のものごとを類推する行為は、理解行為の重要な一面である。はじめて読む文章に対しても私たちは類推によって理解を深める。したがって類推が、どのように学習者の理解を深めるのかを見極めて、国語科授業を構想する必要がある。

(1) 第一に類推が果たす役割を解明する。その際、小学校1年生から中学校1年生までの学習者を、研究対象とする。これは、小学校・中学校学習指導要領の目標で類推と深く関わる「想像力」の育成が目指されていることを前提としたものであるが、同時に類推の求められる学習場面が、年若い学習者に、より多く見られるだろうという見通しによるものである。

ここで問題となるのは、似ているという判断によって比較される既得の体験的知見が、どこから持ち込まれるのかという点である。たとえば『きつねの窓』のきつねは、<ごん>のように一人ぼっちで、さびしかったんだと思う」という類推の場合、既習の『ごんぎつね』についての体験的知見が読むという行為に持ち込まれている。本研究では、学習者の類推がどのような体験的知見によって支えられ、その類推が教室の中でいかに受容されるのかを調査・観察することで、成功した類推が果たす役割を解明する。

(2) 続いて類推を促す手立ての開発を行う。これまでの研究で、小集団討議のような共同的な学習形態が、類推を促すことがわかっている。そこで教材・手引きや発問・学習活動を総合的に開発し、実験授業を行うことで、類推を促す手立てを提案する。

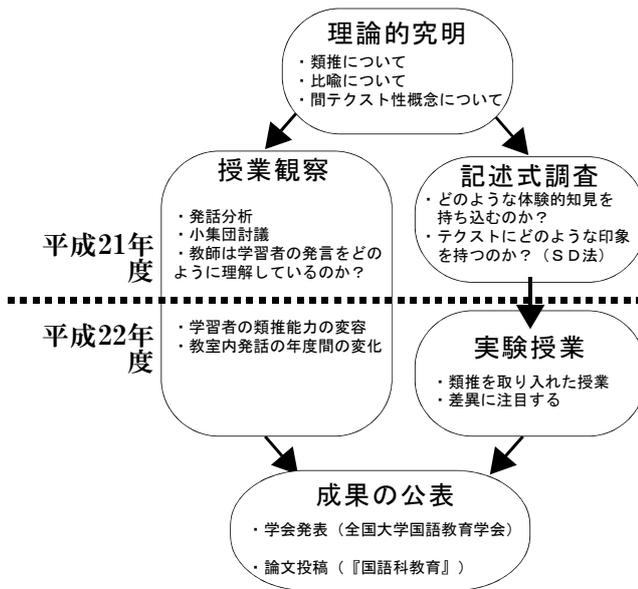
自らの読書経験を拡張する類推は、推論することの有能感をもたらす、読書行為を促すと期待できる。たとえば小学校3年生の説明的文章「めだか」を読んだ子どもが、『何十ぴきも集まって泳ぐことによって、身を守ります。』とあるのは、みんなで大きな魚のふりをして敵を追い払うためだと思います。』と発言した。この類推では既習の『スイミー』についての体験的知見が持ち込まれていた。妥当性という点で見れば、現実のめだかの行動と虚構のスイミーの行動とを結び付ける誤謬を冒している。だが、自分の知っている知見を結びつけることで、目下のテキストがよりよくわかると実感した子どもは、かえって教材「めだか」を積極的に読み深めた。

そこで、本研究では、意味が差違の体系であるという視点を取り入れる。手立てを開発する際には、子どもの既有知識を惹起し、クラスで共有し、差違を検討する手続きを明確

に位置づける。差違を検討する発想を獲得することで、子どもの類推は、促されると考えられるためである。

### 3. 研究の方法

研究の目的を達成するために図に示した計画を立案した。本研究は「理論的究明」「授業観察」「記述式調査」「実験授業」「成果の公表」の5段階で進捗させていく。以下で各段階について述べる。



#### (1) 平成21年度

①理論的究明…「類推」「比喻」「間テキスト性」に関する文献を収集し吟味検討する。関連領域の文献だけでなくNCTE, IRAといった学会発行雑誌の教育論文を参照する。書籍購入, 文献複写, 現物貸借を行う。

②授業観察…授業で学習者が類推する場面に注目して社会的相互作用を分析する。分析にあたっては, C. Cazden, Classroom Discourse の社会言語学的方法を援用する。観察は, 京都市, 沖縄市, 兵庫県丹波市の小学校, 中学校で行う。

③記述式調査…学習者が類推にあたって, どのような既得の体験的知見を持ち込むのか, 記述式調査を行う。同時に学習者がテキストにどのような印象をもっているのかを調査する。体験的知見のカテゴリーとテキストの印象とを比較して検討する。調査は京都市, 沖縄市, 丹波市の小学校, 中学校で行う。

#### (2) 平成22年度以降

④実験授業…類推を取り入れた実験授業を行い検証する。とくに類推によって持ち込まれた体験的知見と, テキストの言葉との「差異」に注目する。例えば『スイミー』を読む

際に『おおきなかぶ』の体験的知見を持ち込んだ場合, 「協力」という類似点よりも, 『おおきなかぶ』の「力」と『スイミー』の「知恵」という差異が, 文章理解を深めることとなる。一人ひとりの発言を分析するために小集団討議を用いる。授業は京都市, 沖縄市, 丹波市の小学校, 中学校で行う。ビデオカメラにより全員の発言を記録する。

⑤授業観察…前年度の授業観察と同様である。ただし, 年度を越えた観察となるため, 学習者の類推能力の変容にも注目する。

⑥成果の公表…全国大学国語教育学会において口頭発表を行う。ノートパソコンを用いた視覚的な発表とする。

### 4. 研究成果

本研究の計画の内, 理論的究明・授業観察・実験授業・成果の公表については, 予定していた通りの成果を挙げる事ができた。ただし記述式の調査が十分に行えなかった。

本研究は, 国語科読むことの学習において, 類似性に基づいた推論を促す手立てを開発することを目的としている。

(1) まず類推が, 教室の中で用いられる場合に, 学習者の読むという行為にどのような役割を果たすのか, 解明にあたった。小学2年生の「スイミー」の授業分析, 「きつねのおきゃくさま」の授業分析, 間テキスト性概念の検討を行ったところ, 次の知見が得られた。

- ①類推は解釈方略であると同時に読書経験を拡張する方略であるということ。
- ②類推が成功するには参加者に類推と認知され承認される必要があること。成功した類推は持ち込んだカテゴリーを強調することになるということ。
- ③類推を促すためには学習者の選択と貢献とが尊重される共同的な学習環境が必要であるということ。

(2) 次に類推の果たす役割を踏まえ, 類推を促す手立ての検討を行った。これまでの研究で, 小集団討議のような共同的な学習形態が, 類推を促すことがわかっており, リテラチャーサークルに代表される小集団の読書プログラムの検討を行ったところ, 以下の知見が得られた。

- ①教材を選択し, 話し合う話題を決定し, 発言を評価するといった, 小集団討議に関わる様々な権限を, 学習者の自己決定に委ねていくこと。
- ②役割シートを足がかりとしながらも, 多様な反応が, 仲間と話を続けることでより多

くの考えが得られるという期待に支えられて、差し出され、受け入れられる共同的学习の場となること。

- ③明示的な教授を行うことと、学習促進者や参加者となることとのバランスを図りながら、とりわけ、討議の足場作りの役割を、教師が担っていくこと。

(3)そして類推を促す手立てを用いた学習活動の開発と検証を行った。沖縄市立高原小学校6年生、京都府私立東山中学校2年生、京都教育大学附属桃山小学校4年生、兵庫県丹波市立春日中学校3年生および兵庫県丹波市立氷上中学校1年生の教室において、小集団で一文を読む学習を組織した。また、沖縄市立美原小学校、沖縄市立美里中学校における小集団の授業を観察した。

学習活動では、類推を促す手立てとして四つのコツを学習者に与えた。「言葉の削除による意味の変化(この言葉があるのとないのでは、意味がどのように変わりますか)」「類義語への置き換えによる意味の変化(AとBとでは意味がどのように変わりますか)」「動作化・映像化による意味理解(今ここで試してみたら、どういう光景か思い浮かべてもら)」「自分の経験との関連づけによる意味づけ(これと似た経験はありますか)」

検証の結果、こうした学習活動が類似性に基づいた推論を促し、さらに次のような効果を生むことがわかった。

- ①適切な手立てを用意すれば、一人でたどり着けなかった解釈と出会い、納得し、楽しさを感じる対話の場を作ることができるということ。
- ②学習者の関わりから生じる学習の意義を実感し、達成感を持つことが、次の活動への積極的な関わり合いを生みだしていくということ。
- ③一人ひとりが解釈を話し、反応を得て、仲間の解釈を聞く対話の段階は、読むことの学習を成立させる条件であり、省略できないということ。
- ④異議申し立てが類推を促し、対話の中で言葉の意味を吟味することが学習意欲を刺激するということ。
- ⑤テキストの部分の解釈と全体の解釈とは相互に依存する相補的な関係であり、同時に排他的な関係の読書行為であること。
- ⑥小集団で一文を読む学習活動は類推の〈活用〉場面になること。

これまでも類推は想像力やイメージといった用語によって国語科教育において究明されてきた。だが「想像力とは頭の中に映画の一場面のような像を作り上げる力である」といった曖昧な定義によって内実が不明瞭なまま研究が進められてきた。本研究では

上述の定義を排してテキストの意味が複数のテキスト間の差異によって決定されるという「間テキスト性」概念を手がかりに類推の果たす役割を解明し、手立てを開発した点に特色がある。類推の成否は、持ち込まれる体験的知見が、教室の中で共有されているものか否かで決定する。類推の役割が明らかになったことで、本研究の成果は、授業構想に資するとともに類推能力の発達論的研究へと展開していくことが期待される。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計5件)

- ①寺田守,「夏を見上げて。」(あさのあつこ)を小集団で読む,三省堂国語教育ことばの学び,査読無し,26号,2012,pp.22-23.
- ②寺田守,読解のコツ―「紅鯉」(丘修三)の一文を読む,三省堂国語教育ことばの学び,査読無し,25号,2011,pp.22-23.
- ③寺田守,「空中ブランコ乗りのキキ」で学んだ後に,三省堂国語教育ことばの学び,査読無し,『中学生の国語』教科書特集号II,2011,pp.12-13.
- ④寺田守,読むことの授業における類似性に基づいた推論の検討:小学校低学年の授業の考察を中心に,京都教育大学国文学会誌,査読無し,36号,2010,pp.25~38.
- ⑤寺田守,戦争児童文学教材の授業の課題:「お母さんの木」(大川悦生)の教材分析を中心に,国語の研究,査読無し,34号,2009年,pp.21-30.

〔学会発表〕(計5件)

- ①寺田守,小集団で一文を読む,京都国語教育アセンブリ,2012年3月24日,京都JA会館(京都府)
- ②寺田守,解釈を巡って対話する文学の授業:小集団で一文を読む,第121回全国大学国語教育学会高知大会,2011年10月30日,高知大学(高知県)
- ③寺田守,これからの文学教育:ことばで抱いきれない〈こころ〉,京都国語教育アセンブリー,2011年3月26日,京都JA会館(京都府)
- ④寺田守,福重浩之,小集団で一文を読む文学教材の学習指導の研究:小学校6年「やまなし」および中学校2年「デューク」の授業分析を中心に,第118回全国大学国語教育学会東京大会,2010年5月30日,東京学芸大学(東京都)
- ⑤寺田守,小集団の読書プログラムについての研究:リテラチャー・サークルを手がかりとして,京都教育大学国文学会,2009年8月1日,京都教育大学(京都府)

〔図書〕（計8件）

- ①寺田守，溪水社，読むという行為を推進する力，2012，全390頁
- ②寺田守，他，明治図書，「教師コミュニケーション力」入門，2012年刊行予定
- ③寺田守，他，学芸図書，児童サービス論，2012年刊行予定
- ④寺田守，他，世界思想社，読書教育を学ぶ人のために，2012年刊行予定
- ⑤寺田守，他，クリエイツかもがわ，特別支援教育ハンドブック，2012，pp.74-75.
- ⑥寺田守編著，京都教育大学国語教育研究会，文学教材の解釈，2011，全135頁
- ⑦寺田守，他，溪水社，文学の授業づくりハンドブック第1巻，2010，pp.126-143.
- ⑧寺田守，他，学芸図書，新たな時代を拓く中学校高等学校国語科教育研究，2010，pp.177-182.

〔その他〕

『文学教材の解釈』電子版

<http://kyoshien.kyokyo-u.ac.jp/public/terada/bungaku.pdf>

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

寺田 守 (TERADA MAMORU)

京都教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：00381020

### (2) 研究分担者

### (3) 連携研究者